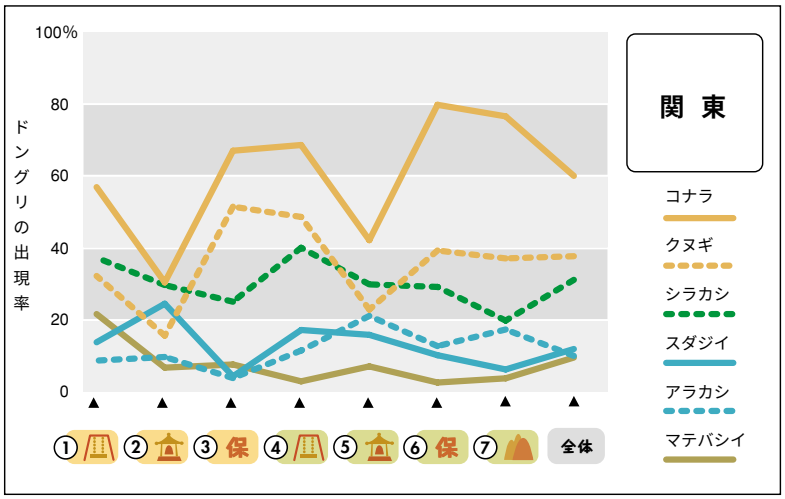
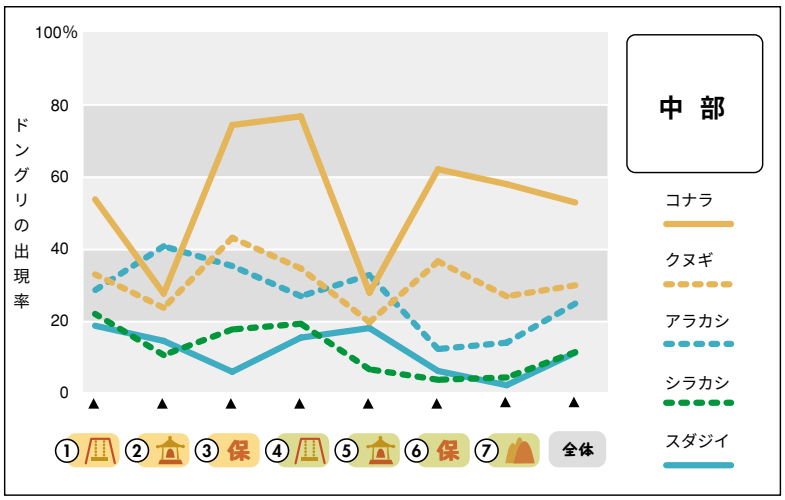
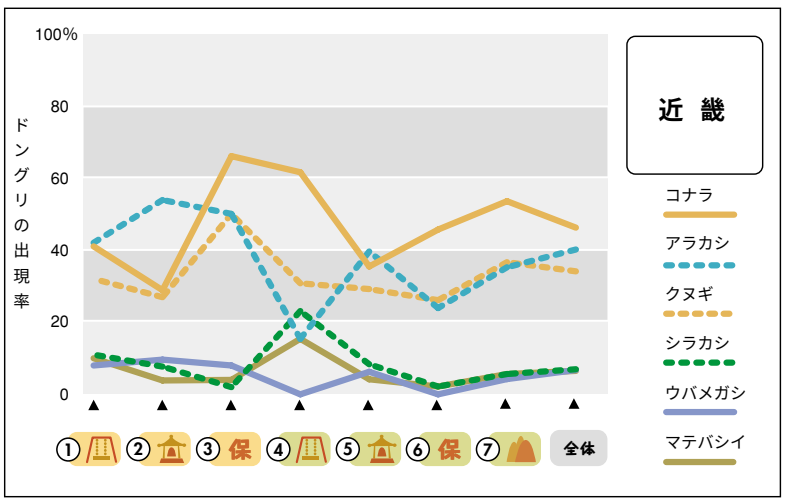
九州・沖縄地方ではさらにアラカシの出現率が高くなり、コジイ(ツブラジイ)やスダジイも多く見られます。

関東以西の本州では保存緑地や斜面林にコナラ・クヌギが圧倒的に多いのは、かつての薪(まき)や炭、あるいは田畑の肥料として重要な樹種であったことのなごりと考えられます。これに対して、屋敷林・社寺林では、強い風や日ざしを遮(さえぎ)り、防火にも役立つ常緑のカシ類、アラカシ・シラカシ・スダジイがよく利用され、市街地・住宅地の公園では、成長が早く、病虫害も少なく、手入れが容易で樹形が美しいシラカシ・スダジイ・マテバシイが好まれていることがわかりました。このように、身近な林では用途に応じてふさわしい樹種が選ばれ、育てられてきたことは、今回の調査からも明らかです。人々の暮らしと、身近な林との密接な関係を読み取ることができます。